

4月に起きた熊本地震。宗門内では、門信徒23人が亡くなり、寺院の本堂や庫裏、門信徒宅の全半壊などが相次ぎ、大きな被害を受けている。大切な人を亡くした悲しみ、現実の厳しさに直面した苦悩は計り知れない。熊本市の寺院と南阿蘇村の土砂崩れの現場を訪ね、その思いに触れた。

## 聴聞できる 場さえあれば

熊本市東区の光輪寺。

4月16日の地震で本堂は倒壊し、周辺の門信徒も大きな被害を受けた。

境内にある光輪保育園の園舎が無事だったことから、地域住民に開放して、避難所の役割を担った。最大70人が共同生活を送った。その間、山田敬史住職(43)は「お互いに感謝を忘れずに」と声をかけた。

隣の益城町から参拝した女性性は「本堂がなくなり、きつとご住職は心では泣いておられるだろうに、私たち門信徒だけでなく地域のために奔走されています。その姿に心動かされます」と話した。

## みんなと話し 心が救われる

6月8日の法座を訪ねた。参拝してきた30人ほどの門信徒が、「ひどかったですね」とお互いに声を掛け合い、再会を喜び合う。おつとめを終え、山田住職はやさしい笑顔で「法座を開くことができ、お話を聞ける身を感じています。一緒にご聴聞しましょうね」と語りかけた(写真)。

法座の前に、庫裏の台所では女性たちの活気あふれる声飛び交っていた。5月の法座の時には、宗派のボランティアから炊き出しの支援を受けたが、今回から再び自分たちでお斎を作った。

台所の壁は壊れたまま。食器はすべて割れてしまったので、この日は、仏僧が持ち寄った山菜おこわ、煮豆、野菜の炊き合わせなどをパックに詰めた。「大丈夫だった?」「大丈夫じゃない。家はもうぐちゃぐちゃ」と語り合いながらパック詰める会員たち。

益城町の田口真理子さん(63)は3升分のおこわを炊いて持参した。家は基礎がずれて住むことができない。現在、自宅前のプレハブで夫と姑の3人で暮らす。「4年ほど前から、高齢となった実母も一緒に暮らしていたんですが、

# 絆深め合おう常例法座

ます。法話を聴聞した後、みんなでお斎を囲みながらいろんな話ができるのもうれしい」と話した。

## 本堂なくとも 私たちのお寺

法座には門徒総代の濱砂具弘さん(75)の姿もあった。濱砂さんは、倒壊した本堂を解体するボランティアを手伝おうと、ほぼ毎日、お寺に通い続けたという。更地となった後も境内を清掃し続ける。「全壊した本堂を見た時は涙が止まりませんでした。私たちがもつらいが、ご住職はもっときつかったと思います。けれども本堂がなくてもここは私たちのお寺。私にできることをさせていたたくばかりありません」と話す。

山田住職は「どんな時でも仏さまの教えは生き続け、私に伝わってきます。その教えを聞かせていたたく身を喜びながら法座を続けていきたい」と話す。

地震後、あらためてみ教えで結ばれている縁を確かめ合おう門信徒たち。互いの思いを語り合える場所がある喜びを静かにかみ締めていた。

親しき人と  
被災のつらさ 悲しさを分かち合い  
ひとときゆるむ表情



## 本堂が全壊 保育園舎で聴聞

地震のショックで一晩中叫んだりするようになってしまいました。母の世話しながら、地震後のいろんな片付けに追われ、気付けば体重が激減していました。息子たちが、母を入院させるように勧めてくれました。少し気持ちが落ち着き、時間もできたので、「みんなのためにできることを」と、おこわを用意させていただきました」と話した。

隣にいた福田由美子さん(64)が「私も、家を解体しないといけないし、姑の認知症の症状がひどくなりました。夫が自治会長で、私が民生委員。地域の皆さんの相談を受けるので、家族の世話や家の片付けが後回しになってしまい、大変でした」と話す。お互いに、スマホで写した自宅の被害の様子などを見せ合い、同じ悩みを打ち明ける。彼女たちの表情が少し緩み、笑顔がこぼれるようになってきた。

仏僧会長の榎田節子さん(78)は「私も家の片付けに追われていました。家族と共に避難生活を送る中で疲労やストレスもたまりだしていたので、みんなでごうやって集まって話せることで心が救われ



家の被災、家族の介護など、人に言えないような悩みを抱える門信徒たちを温かな笑顔で迎える山田敬史住職(中央)。門信徒たち同士も悩みを分かち合い、少しずつ笑顔になった